

# デフレ脱却とキャッシュレス化



NTTデータ経営研究所取締役会長  
宮野谷 篤

経済産業省によれば、日本のキャッシュレス決済比率は2008年からの8年間で8割上昇した。クレジットカードと電子マネーが伸びている。5万円以上の高額決済ではクレジットカードの使用率が6割程度に達しており、欧米に近い。一方、5000円以下の低額決済では現金の使用率が7〜8割と、欧米（5割程度）に比べ非常に高い。

そこで、硬貨の流通高（ストック）を見ると、10円以下の硬貨は減少を続けており、50円貨は横ばい圏内の動きにとどまっている。これは、電子マネーなどの普及に伴い、「小銭レス化」が進行していることを示している。しかし、キャッシュレス化の進行にもかかわらず、5000円貨はおおむね前年比2%増と、千円札と同様のペースで増え続けている。なぜだろうか。

超低金利で現金保有の機会費用が実質ゼロ状態にあること以外に、二つ要因がある。第一に、5000円という硬貨の額面は国際的に見て非常に大きい。欧米先進国の硬貨最高額面は、米国1ドル（約110円）、欧州2ユーロ（約225円）、英国2ポンド（約275円）。5000円に匹敵するのはスイスの5フラン（約550円）のみ

である。第二に、日本では長らくデフレが続いたので、5000円の経済価値が高い。先進国中、ワンコインで「ビッグマック」が買えるのは日本だけだ。日本のビッグマックは390円だが、スイスでは6・5フランもする。

キャッシュレス化は、5000円貨の流通ストック減少をもたらすまでには至っていないが、5000円貨の取引需要の一部は電子マネーなどに代替されているだろう。一見、千円札より5000円貨の方がキャッシュレス化の対象になりそうに思える。流通枚数で比較すると、「1000円貨対千円札」の流通枚数比が低下トレンドにあるのに対し、「5000円貨対千円札」の枚数比はここ10年間1・1倍程度で安定している。5000円貨の方が千円札よりもキャッシュレス化の影響を強く受けている様子はない。つまり5000円貨は「お札」の実力を備えており、小銭ではないのだ。

ビッグマックの価格は2018年に10円上がった。仮に今後毎年10円（約2%）ずつ上がるとしても、5000円を超えるのは12年後。5000円貨が「小銭化」するのは相対先になりそうだ。

## 巻頭言